

川 雜 叢 書

有情



Noji,

---

橋高薰風子著

川柳句集 **有情** (うじょう)



1962



川柳雜誌社版

---



著 者

目次

有情……………(一)

紫の椅子……………(二九)

往還……………(八五)

## 序

句の発表の手段として、新聞、雑誌、放送、柳誌が主たるものであるが、それ等はいつでも歳月とともに散逸してしまう可能性が大きい。殊に放送はすぐと忘れられるおそれがある。その点から簡人句集として句を遺すことは、今のところ最良の方法だと云えよう。

従来簡人句集は作家の還暦とか、古稀とかの簡人的慶事や、故人を追憶する意味で行されたもの、又は何等かの記念に上梓されたものが多かった。しかし、簡人句集は自己の作品の足あとを回顧反省するためのもの、つまり自己の句の成長振りを知り未来への飛躍を約束するものであってこそ、最大の意義があるのではないかと思う。従来もその意味で上梓されたものが皆無だとは云えないが、たいていの簡人句集は右に述べたように、自己の作品の終止符的刊行に終ったものが多い。

今回、橘高薫風子君が、句集を出したいからと云う話を持ち込んで来た。この句集は

右に述べた記念的出版ではなく、自己の作品の一段階としての発表だと云うのであるから、大いに賛意を表し、出来るだけ出版に関する援助を惜しまなかつた訳である。

薫風子君は川柳不朽洞会の会員であると同時に、川柳雑誌社の編集部員でもある。句作上の年輪は必ずしも多いとは云えないが、句は主として「川柳雑誌」の川柳塔欄に発表したものであり、更にそれ等の句を精選したものであるから、新進作家として推奨に価するレベルの高い句集であることは自負していいだろう。

薫風子君は若いけれども、社会の一員として、一ト通りのエチケットを心得た好青年紳士である。老いたる母には孝養の人で、妻子には愛情の深い、よき夫であり、よきパパであることは句によつてもうかがい知ることが出来る。しかも句の持つ領域はなかなかに巾広いものがあるので、前途に多くの期待を懸けることの出来る作家である。

一九六二年の初秋

川柳雑誌社編集局にて

麻 生 路 郎 識

表紙 | 題字

野尻 弘 | 麻生路郎

有情



労働歌 蟻が歌えば凄かろう

✓ 学生を矢<sup>や</sup>面<sup>おもて</sup>に立て 国貧し

蕎麦の花 地球滅びるなど思えず

毛皮着て貧しい心とは見えぬ

✓  
椅子蹴って立ったに続くものがなし

失いしものと得しものこの友に

風邪ひいただけで男の嵩だかし

手紙など書きたき風邪の癒り際

病人の長い手紙も哀れなり

明  
け  
方  
の  
火  
事  
を  
病  
人  
知  
っ  
て  
い  
た

病  
み  
上  
り  
蟬  
を  
放  
し  
て  
や  
れ  
と  
云  
い

病  
み  
上  
り  
街  
は  
光  
に  
満  
ち  
あ  
ふ  
れ

木も草も花をつけてる誕生日  
四月四日 長女章子誕生

春闘の真ッ只中に子が生れ

冬晴れて見馴れし山も高く見え  
一月十三日 二女幸誕生

✓子の潔癖 母の枕を父にさせず

✓暖い書齋 麻疹の子にとられ

✓三輪車 ポストへはまだ背が足らず

都会の夜　セロリは母の香に似たり

一匹の蚊母入院に　病室の広いこと

かかる時母再び入院　海の晦さを持つ蚊帳よ

妻の癖　すぐに値段のことを云う

ノ　子が生れた妻　宝石をもう云わず

喪服着た妻に女が残こつてた

つとさした夫の傘の大ききさよ

ノ妻の留守食パン真ッ直ぐに切れず

✓ 熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り

父親が優しうなった左り前

逆境にいて風呂好きの父を持ち

逆境の父は邪教に凝りはじめ

この頃の尿の細さよ  
落ちぶれぬ

四面楚歌  
故郷は豆の花の頃

麦の穂が目  
を刺しそ  
うな都  
落ち

勤勉の額もろともに家を売り

風鈴を残して家は売られたり

寂として墓石 蜻蛉も動かない

∪わが妻になすべかりしを 賀状書く

遠い灯は 人を想えというごとし

浚渫船も 恋も 一日位置を換えず

本心が二伸に女心かも

原  
始  
か  
ら  
女  
の  
姿  
水  
を  
汲  
み

女  
な  
る  
か  
な  
や  
こ  
の  
女  
優  
も  
芸  
者  
が  
似  
合  
い

剃りあとの青さが非力とも見え  
ず

見合にも口数多き男なり

湯槽出る男海より出ることし

落選の酒は問答無用なり

この頃の酒量ただ事とも見えず

昼の月お前も二日酔なのか

おしなべて 銀も鉛も卒業す

天才の根気の無さが哀れなり

親切な官吏なかなか出世せず

旨いとも云わず新聞ばかり読み

女中へはかけがえのない皿と云う

降って来たから止めようという齢になり

親捨てた仲とも見えぬ老夫婦

六十を越した家出は哀れなり

老醜の土筆ほどにはなけれども

✓ 竹植えて 雨うつ音を樂しめり

文机に菜根譚を伏せて 留守

✓ 雑念をしずめる丸さ 壺は持ち

し煙草のけむりも窓から出て行けり 春

旅に出たし 子に画く絵にも汽車電車

地図と一緒に夢を畳めり

鳥取砂丘

し砂丘有情 お前と月の出を待とう

旅人も月もやがては去る砂丘

白浜千疊敷にて

し海の没り日に岩礁のみ染まろうとせず

句集「三文オペラ」の岩井三窓君結婚

三文オペラ 第二幕へとかかりたり

皆君のもの 新妻の寝顔まで

武部香林氏夫妻を想う

淀川の土筆送らんすべもなし

七七忌

金魚の糞もただならず

須崎豆秋さんを悼む 一句

飯を食うさえも  
勇気の要る日なり

焦燥へ 夕日と月が  
入れかわり

✓ 恩借に 父の容態ねぎらわれ

✓ プラスアルファ 心さもしく解決し

✓ この人も 金を持たせば愚かなり

蛇行して 蛇行して 川淋しけれ

汽車ですら うしろ姿はうらわびし

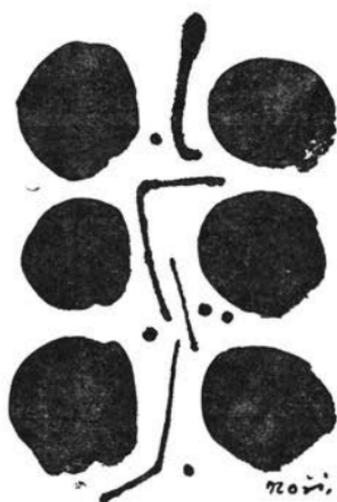
万歳万歳 淋しさの残りける

✓  
檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし

雪體々 湖一つ埋め残し

十二月 宝石の美の極まれり

紫の椅子



惜しみなく愛は奪えと　曼珠沙華

独楽二つ回りいることは息苦し

引金をひく一瞬が恋にあり

恋たのし切符も二枚買うて待ち

✓眼鏡にも青葉映して恋たのし

草いきれ万葉の世の相聞歌

二枚ずつ　二枚ずつ　切る　熱海駅

／　恋あわれ　男が花の水を替え

／　鶏頭の紅さが憎し　逢えぬ日は

新劇の台詞めいたるプロポーズ

看護婦の恋門限を口に出し

困われたまままで小鳥のように死に

これも おやすみなさいで終わってる恋文

病人の恋は手紙の嵩を見せ

日記帳 K子K子が続いている

もう俺をのけものにして逢うている

惚れている方がハンカチ敷いてやり

✓  
モ  
ー  
ニ  
ン  
グ  
着  
た  
日  
も  
顔  
を  
見  
せ  
に  
く  
る

性欲と恋をこっちやにして話し

所在なさに女と五目並べてる

失恋が室戸の波を見に行けり

首巻をして晩年を汚す恋

恋に倦み女魚より生臭し

気が付けば恋のかけらを拾うてた

履きかえの足袋だけ持って女旅

緞帳の豪華さに酔う女にて

花の散るすがたとこころ女にも

✓ 花の香を嗅ぐ顔をして接吻し

疑えば女の帯も蛇に見え

大金を持って見たとて女かな

青天の霹靂 乳房黒くなり

逃げおおせるものと 女は思つて居

男の嘘 女の嘘にしてやられ

一口もきかずに化粧出来上り

鏡台の前の思案はたかが知れ

出来心　ダイヤの指輪していても

女郎花のような女はもう居らず

✓  
白百合のようというたが気に入らず

見えすいたからくり  
それも女なり

前身は仲居 上手に蟹を食べ

落ちぶれて逢いたがらぬも女なり

番台にも謎の女としてうつり

恋人の頸うなじが月見草に似て

✓  
指にさえ表情持っている女

さようなら 女の好きな台詞なり

末っ娘ももう声上げず泣く齡に

女十六泣いてもこころ満たずなり

小説の恋より知らぬ娘に育て

瓜赤く染めても何処かじじむさし

泊る気になつて外したイヤリング

男へはつらい逢瀬と云うておき

パ  
ト  
ロ  
ン  
が  
替  
わ  
り  
香  
水  
が  
替  
わ  
り

蛇  
が  
皮  
を  
脱  
ぐ  
よ  
う  
に  
ま  
た  
離  
婚  
し  
た

慰  
謝  
料  
に  
感  
傷  
は  
も  
う  
交  
っ  
て  
ず

恪氣していても湯だけはたぎらせて

静かなる嫉妬 坐ったままで待ち

未亡人 どの親切も淋しうて

執念のよ  
うに媚  
婦は貯  
め続  
け

子  
供等  
にマ  
マと  
呼  
ば  
せ  
る  
後  
妻  
が  
来

継  
母  
の  
思  
い  
出  
に  
針  
つ  
き  
ま  
と  
い

オールドミス 娼婦のよう な手紙書 く

女 なり 手紙 であ り っ た け を 云 う

振 り 返 り は せ ぬ か と 女 ま だ 立 っ て

高島田 猫背のくせが出てしまい

美人とはいいいないな 眼鏡に個性が出

肉体というムードではないおばあちゃん

姑がまた我をとおす釘の位置

ぼんぼんの嫁は標準語を使い

母に似てこの娘も百貨店が好き

菊の露ふくんで母の針仕事

しもう嘘を見抜いて母の眼が優し

✓あたたかき孟母のような母ならで

妻がもう口あけて寝るようになり

毛皮着た妻になじめぬものが出来

妻の日記　もう子供等のことばかり

ノ 妻若し 産衣すら縫うことをせず

ノ 妻若し 水道一ツばいにひねり

小説に 乙女心を奪われし

猫がもう膝にのってる 女客

ざあますに妻もなってる 女客

灯がついてからは落ち着く 女客

毒舌に負けてはおらぬ流行っ妓

暴君のところが好きと妓惚れ

浴衣着て又一段と名妓たり

トンネルを出た思いなるお元日

元日だ 吸いさし 喫うのなど 止そう

元日を旧い家風が落ちて着かせ

遠景に風あり  
松の内  
のどか

銭湯の開くのを待つも  
松の内

水道の洩れたままなり  
お正月

島の春 段々島は南向き

サーカスの五色の玉は春のもの

童心にかえれとすみれれんげ草

浮世絵の白い肌にも 春と秋

素人の浄瑠璃 土の匂いがし

秋の夜の夜店の裏の闇が濃し

菜の花を視野に  
交番  
眠くなり

V  
牡丹へは  
蜂も  
静かな  
訪問者

種蒔きへ  
夕日  
安心して  
沈み

√ 小便小僧に 五月の風のすばらしさ

浴衣着た人に紫陽花似て涼し

今日あたり風鈴吊らん陶泓忌

釈迦牟尼も 真夏の肌にまませり

島一つ買って暮らせば 涼しかる

キリストの肋に似たる昼寝をし

商いのラムネ一本抜く暑さ

真心を押しつけられている暑さ

夏料理 緋鯉の見える縁に座し

菊大輪 日本も支那も古い国

菊大輪 雲湧き上るごとくなり

菊花展 白菊黄菊暮れ残る

菊人形 小楠公は赤い菊

野菊咲く島で流人として終り

菊の香に 二十一世紀が近し

し牛小屋に月光 美しき浪費

雪の朝 椿はやはり朱けに咲き

洗われて 葱の香少し甦る

十二月 カナリヤの餌をまた忘れ

✓  
十二月 子供ばかりで飯を食べ

お隣も炭を割ってる大晦日

子供とはたった一と切れ食べ残し

幼稚園 もうグループというがあり

嘘をつく大人だとは子も知っている

夕立のよ  
うに泣き  
止む男の  
子

好きな娘  
に花火持  
たせて男  
の子

男の子  
臍まで濡  
らし戻っ  
て来

い  
い  
返  
事  
し  
て  
ブ  
ラ  
ン  
コ  
を  
飛  
降  
り  
る

叱  
ら  
れ  
て  
ブ  
ラ  
ン  
コ  
で  
空  
蹴  
っ  
て  
い  
る

叱  
ら  
れ  
た  
子  
の  
部  
屋  
に  
ま  
だ  
灯  
が  
点  
か  
ず

合格の朝 お隣の前も掃き

新学期 少しがたつく椅子もあり

遠足の帰りはみんな無口なり

ポケットの小銭鳴らしてホッピング

✓先生に床屋の順をゆずるなり

通信簿 父が真顔になつてくる

✓ 実力でした合格と子は思い

小遣いが切れるとうちにいる息子

血を分けたわが子にしては覇気がなし

夜の茶漬　　パパは象牙の箸鳴らし

地震にも煙草を喫うておった父

父親になつても膝を抱く癖が

欲のない父を家申して案じ

父の手の太さは手品にはむかず

ベッドから落ちたを父はひたかくし

氷割る手つきぶざまな男親

✓ 父と来て ずっと風呂敷持たされる

父親の財布の中味且って見ず

春らしいものに紋白蝶の紋

獲物の大きさに 蟻 うろたえる

行き先はアルサロだったとは 螢

家中の一番涼しいところに猫

不器用な猫だ　また骨立てている

使用人と主人の区別　猫も知り

やはり雑犬 道草ばかり食い

水際にシエパードがいて黄昏る

立話 長うて犬も坐り換え

余生送るよ  
うに水族館の鯛

籠の鳥とらわれの身の顔してず

七面鳥その風格が聖者めき

行きかえり  
牛はおんなじ  
歩巾なり

象の小屋  
鎖ひきずる音ばかり

鼻を振る象の媚態もあわれなり

似は似ても  
狼の影  
犬の影

蜘蛛の巣の憎し  
一糸も乱れぬは

逃げるための脚を  
鹿さずけられ

往還



青春は旗蹴えるごとくなり

思い出は散らず野の薔薇散ろうとも

湖の狐独は雲を映すのみ

真ッ直ぐな道は さびしいものを持つ

✓ 一線を自分で引いて 淋しがり

天を指す蔓へ さびしくなるばかり

宰相の私生児として生れ落ち

✓ 俗中の俗ライターを和尚持ち

クラブ振る作家となりぬこの人も

パチンコの玉にも愚弄されて去に

複雑な世相とオモチャ屋も思い

デマ売って食う人生もあるのなり

病院の風呂から藤の棚が見え

病室に林檎 健康色過ぎる

重症へ冬の苺が届けられ

肺病が癒った時に寿命が来

僕の齡 啄木はもう死んでいた

手術台 思想も恋も捨ててのり

酒徒あまた 李白の気概すでになし

✓ 酒の手のあがりしのみ四十過ぐ

コップ酒 水飲むように飲み干せり

裏切った方も酒量が増えてくる

本心を明かした酒がまだ醒めず

稲門の出とアル中は別のこと

居酒屋の楽書帖に詩人の名

飲み仲間誰が誘うたわけでなし

二次会のここも早稲田の歌になり

満員車 一升塚をかばうてる

しゃべり酒 子供面白がって聞き

炬燵から片手だけ出し 飲んで  
いる

鶯の啼く庭に來た執達吏

手際よい処置の憎さも執達吏

執達吏　オーバー　歸るまで脱がず

封印をされた箆筒が嵩だかし

毛脛撫でながら債鬼はとりあわず

某月某日 税吏のメモの怖しさ

税務署へすかたん云うて押し通し

ここでまた税吏女将にとぼけられ

正直へ税吏が助言してくれる

追い討をかけるは金のことらしい

そう云えばそんな気がする借りが出る

でぼちんを叩いて金を借りて去に

金借せといわれ他人の顔になり

人相が金貯めだしてから変り

金貯める主義には少し若過ぎる

税金を甘く見ている人に会い

借りるだけにある銀行と思っている居

金に物云わせ善意がこじれて来

人間のくらし 埃りにすぐ慣れる

埃っぽい男 あれあれ 立候補

名を挙げてからは ちよくちよく 帰郷する

知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり

若い目が見ているんだぞ政治家よ

代議士に死んだ後まで利用され

力士　いま　自分の汗の上に這い

一生に自分の家も持たず死に

／＼ 真人間だったばかりに死を選び

逆臣といわれし人と同じ紋

前身を知る朋輩を寄せつけず

近道を本人だけがしたつもり

つ　つ　立　つ　た　ま　ま　で　物　云　う　弟　子　に　な　り

頼　杖　の　師　に　こ　ん　こ　ん　と　さ　と　さ　れ　る

道　遠　し　師　弟　二　人　っ　き　り　と　な　り

施設の子  
盛り切り飯の  
ほか知らず

参観日  
この秀才の親  
が来ず

乞食の子  
おじぎした  
まま寝てしま  
い

鶏も飼うてる島の測候所

この島も情話を抱いて寝しずまり

故郷を出た日もこんな雲が浮き

その頃の市電乗換券があり

行李から女中アルバム出して見せ

新聞小説 仲居が先に目を通し

仏様へ 青いバナナを 供えとき

蜘蛛が巣を繕うに似た屋根 普請

別荘は 犬小屋だけが 焼け残り

糸切れた風にさも似た離婚沙汰

ペコペコの鋸を素人もてあまし

ステッキの先でくらげは突つかれる

松毬を拾うて楽し  
山の燭

帯きゆつと鳴るも嬉しい見合の日

煎餅を割つて食べるも見合の日

水鼻をかむ間 電話を待たしとき

道ちよつと聞くに相手が綺麗すぎ

衝立の陰の手真似は幹事さん

叱られる使いと知らぬお人好し

甘栗の皮を散らかすいやしんぼ

何もせぬのがヨット部に籍を置き

横やりが奴の趣味とは知らなんだ

やせっぽち あんな度胸も持ちあわせ

受け売りと思わせぬもお人柄

バンガローから朝刊を読みにくる

バンガロー隣はことりともさせず

大げさに雪崩に遭うたことを云い

吊橋を揺るがせてゆく若さあり

白樺を削っただけの遭難碑

パトロール若し顎紐かけてくる

三角になった墨をばまだ使

焼跡の凹んだ鍋で湯を沸し

朝晩を市電で通う老主任

強引な碁をうつ鞞をよしとする

テレビ買わぬを主義のように云う

卑怯者にされておこうと盃受けず

✓  
使  
い  
込  
み  
女  
に  
甘  
い  
人  
だ  
っ  
た

大  
学  
を  
出  
た  
跡  
継  
ぎ  
が  
寄  
り  
つ  
か  
ず

信  
心  
を  
し  
ろ  
と  
主  
治  
医  
に  
も  
云  
わ  
れ

神前で傲然といるベレー帽

恥を知る顔とは見えぬサングラス

用心棒 国の訛がまだとれず

傘さしてやってる方が刑事なり

その次の船で刑事も島へ着き

愛の巣を私立探偵見上げてる

ポケットに隠し切れぬ手錠にて

高飛びの道連れなどつゆ知らず

夜の汽車 空気枕を譲り合う

鯛買うたことが長屋に知れ渡り

同居して魚を片身ずつ分ける

横丁の夕日の中の紙芝居

弁当の大きい順に朝を出す

✓ 更生の一日二日雨が降り

別居して以来物質主義となり

鳶の輪の下は一面水害地

淋しさは義肢に靴下履かせて出

心まで濡れそう告別式の雨

筆勢が良うて無心の字に向かず

ベレー帽着て看板屋夢を持ち

セーヌ河畔の貸間で今日の画家となり

現職の間は小さい家に住み

ブローカーのコツで縁談まとめて来

日本へ少し落目のジャズバンド

ゲイバーのナンバーワンは高商出

都会淋しや女の紐というがあり

✓ 都会の哀愁 ナイターの灯が消える

鼻かめば鼻の黒さも大阪や

水屋の子を預った水都祭

図書館も市庁も古びた水都祭

瓦斯タンクの傍で結構人が住み

煙突の高さも高し此花区

寒空へどの煙突も煙吐き

絵本一冊売れても夜店並べ替え

今撤いた水が凍っている屋台

火気厳禁寒々として城があり

皆帰る足どりに見え 十二月

雲をつかむ話に乗った十二月

大晦日 諸行無常とすまされず

土少しつけて苗木が届けられ

朝の日へ花と並んで立っている

花束の花皆上を向く佳き日

猫の眼にさえ暇人とうつるならん

梅の書齋 漱石全集揃えられ

フランス語講座 女優の書架にあり

深く吸う煙草  
勝算胸にあり

ライバルの前  
さりげなく  
さりげなく

磊落に笑うて  
不安かくしとく

東京で遺産が二年とはもたず

東京へ出たら出たらと若社長

左遷から住めば都と便りが来

新入社 眼鏡も一つはりこんで

新入社 廊下の床がよく滑り

社のホーブ オールバックがよく似合い

郊外の夕日へ戻る勤め人

洒落たつもりが上役を恐らせる

シヨックですなどと抜擢うれしそう

腹案を抱いて 大江橋渡る

日銀は誰が這入ってゆくでなく

日当りの悪い窓なり 株式課

新生の吸殻もあり  
清交社

沢庵を噛むにも  
社長豪快な

①社長のスランプ  
人間ドックへ這入ってる

レジャーブームを 先代は笑うらん

先代に笑うた写真などはなし

火に熔けぬものなし 五島慶太の訃

横顔に 小泉八雲生きて  
いる

宰相の顔に迷いはなきごとし

虎の皮敷いて国粹主義で  
いる

ことりともさせぬ数学教授室

三味線も弾ける大学教授なり

学問の灯は落ち着けり師走にも

猫の首つかみ二階を降りてくる

冷水摩擦の頑固一徹

銭湯の籠へ痼症見せており

作業衣に折尺さして隙がなし

作業服着ればいよいよ無口なり

無精髭 第一ボタン外れてる

先生に飲屋の借りも少しあり

級長の欠伸に教師気がとがり

校長の子がいて教師気が疲れ

自衛隊の制服を着て養子来る

養母にある色気に養子気がつまり

時代なり天衣無縫の養子が来

夏祭 男に似合う豆絞り

滝の音 男心が通じ合う

✓  
四十過ぎ ようやく向い風となり

鳥籠を預けて夫婦旅に出る

湯の宿の意外な窓に富士が見え

鳩に餌をやるのも旅のころなる

一人旅 町の祭に行き合わせ

牧場の柵にもたれている旅情

木の柵が森に続いてい  
る牧場

遠泳の雲まで泳ぐ意気を見せ

海女の墓日は海に出て海に没る

✓ 髪ふり乱す女に似たり海の荒れ

悲しみが夜汽車のように遠去かる

✓  
過去へ向って流れるごとし 笛の音は

囲炉裏での話 来し方ばかりなり

独身の机の上の磯じまん

独り身に造花の埃りよく目立ち

独り身に魚の骨はさびしすぎ

いい眉に床屋剃刀当てずおく

散髪をして 寿司を食う 地下があり

みんな髭剃ってる 港近くなり

恐妻家 どころか張子の虎に似る

四人目の出来るを 晩酌聞かされる

母親を呼んでいる子へ 祖母が来る

乳飲ます顔は尊し猫さえも

子が泣いて縫目だんだん粗うなり

ボス今日は子の親として並ばされ

保線夫の息 鉄くさく 酒くさく

男らしい足に踏まれた 霜柱

見栄もなく冬の立木のごとくいる

✓ さびしきは一本杉に似て老いる

✓ 手を汚さない生活がふとさびし

空にまで夢のなくなる世がさびし

風鈴が錆びついたまま  
旧家なり

説法を終えた教祖の菊いじり

呼鈴を大言海の上に載せ

棕 栢の 木も 由緒 正しい 寺に 見え

色 即是 空など とは 仏の たまわ ず

旅 僧の うしろ 姿が 舞台め ぐ

テロリスト 神明に加護祈るなり

武運長久以来 祈ったことがなし

祈りから目を挙げ 花の鮮やかさ

聖夜の餐莊嚴ミサ神父の靴は常のまま

クリスマストマトの赤も異宗めく

莊嚴ミサ 嬰兒祈らず 神に近し

孝行の仕方 兄弟みな違い

✓ 墓建てる孝行がまだ残ってる

通夜の隅 裏切り者として坐り

√人の世や 棺に打ち込む釘もあり

霊柩車 辻を曲ってから 速し

棺の出たあとの夕焼 見事なり

香  
煙  
縷  
々  
  
い  
の  
ち  
惜  
し  
め  
と  
い  
う  
ご  
と  
し



遠泳の……………一五二  
 遠景に……………五九  
 遠足の……………七三  
 煙突の……………一三一  
**お**  
 追い討を……………九九  
 大げさに……………一一六  
 大晦日……………一三三  
 おしなべて……………一八  
 惜しみなく……………三〇  
 落ちぶれて……………四三  
 男の嘘……………四〇  
 男の子……………七一  
 男へは……………四六  
 男らしい……………一五八  
 お隣も……………六九  
 帯きゆつと……………一一二  
 女郎花の……………四二  
 思ひ出は……………八六

親捨てた……………二〇  
 檻の鶴……………二八  
 オールドミス……………五〇  
 恩借に……………二六  
 女十六……………四五  
 女なり……………五〇  
 女なるかなや……………一五  
**か**  
 かかる時……………八  
 火気厳禁……………一三二  
 学生を……………二  
 学問の……………一四四  
 過去へ向つて……………一五三  
 開われた……………三三  
 籠の鳥……………八二  
 傘さして……………一二二  
 瓦斯タンク……………一三一  
 風邪ひいた……………四  
 悲しみが……………一五三

金借せと……………一〇〇  
 金貯める……………一〇〇  
 金に物……………一〇一  
 髪ふり乱す……………一五二  
 借りるだけに……………一〇一  
 看護婦の……………三三  
 元日だ……………五八  
 元日を……………五八  
 棺の出た……………一六五  
**き**  
 気が付けば……………三七  
 菊大輪雲……………六六  
 菊大輪日本……………六六  
 菊人形……………六七  
 菊の香に……………六七  
 菊の露……………五三  
 汽車ですら……………二七  
 菊花展……………六六  
 木の柵が……………一五一

木も草も……………一六

逆境に……………一一

逆境の……………一一

逆臣と……………一〇五

級長の……………一四七

今日あたり……………六三

恐妻家……………一五六

鏡台の……………四一

キリストの……………六四

勤勉の……………一三

く

草いきれ……………三一

首巻を……………三七

蜘蛛が巣を……………一一〇

蜘蛛の巣の……………八四

雲をつかむ……………一三三

クラブ振る……………八八

クリスマス……………一六三

け

鶏頭の……………三二

ゲイバーの……………一二九

毛皮着た……………五四

毛皮着て……………三

毛脛撫で……………九七

原始から……………一五

現職の……………一二八

こ

恋あわれ……………三二

恋たのし……………三一

恋に倦み……………三七

恋人の……………四四

強引な……………一九

香煙縷々……………一六六

郊外の……………一三九

合格の……………七三

孝行の……………一六四

更生の……………一二五

校長の……………一四七

行李から……………一〇九

氷屋の……………一三〇

氷割る……………七八

子が生れ……………九

子が泣いて……………一五七

ここでもた……………九八

心まで……………一二六

乞食の子……………一〇七

炬燵から……………九五

小遣いが……………七五

コップ酒……………九二

子供とは……………七〇

子供等に……………四九

ことりとも……………一四四

子の潔癖……………七

この頃の尿……………一二

この頃の酒量……………一七  
この島も……………一〇八  
この人も……………二六  
独楽二つ……………三〇  
これもおやすみ……………三四

さ

ざあますに……………五六  
宰相の顔……………一四三  
宰相の私生児……………八八  
サーカスの……………六〇  
砂丘有情……………二三  
作業衣に……………一四六  
作業服……………一四六  
酒の手の……………九二  
左遷から……………一三七  
雑念を……………二一  
さびしさは一本杉……………一五九  
淋しさは義肢……………一二六  
三味線も……………一四四

寒空へ……………一三一  
さようなら……………四四  
三角に……………一一八  
参観日……………一〇七  
散髪を……………一五五  
三文オペラ……………二四  
三輪車……………七

し

自衛隊の……………一四八  
叱られた……………七二  
叱られて……………七二  
叱られる……………一一四  
色即是空……………一六一  
四十過ぎ……………一四九  
静かなる……………四八  
施設の子……………一〇七  
時代なり……………一四八  
執達吏……………九六  
実力で……………七五

失恋が……………三六  
島の春……………六〇  
島一つ……………六四  
四面楚歌……………一二  
釈迦牟尼も……………六四  
寂として……………一三  
社長のスランプ……………一四一  
社のホープ……………一三八  
しゃべり酒……………九五  
洒落たつもりが……………一三九  
重症へ……………九〇  
姑が……………五二  
十二月カナリヤ……………六九  
十二月子供……………六九  
十二月宝石……………二八  
執念の……………四九  
手術台……………九一  
酒徒あまた……………九二  
棕櫚の木も……………一六一  
春闘の……………六



代議士に……………一〇三  
 大金を……………三九  
 鯛買った……………一四  
 高島田……………五一  
 高飛びの……………一三  
 滝の音……………一四九  
 沢庵を……………一四一  
 竹植えて……………二一  
 蛇行して……………二七  
 立話……………八一  
 煙草のけむり……………二二  
 旅僧の……………一六一  
 旅に出たし……………二二  
 旅人も……………二三  
 種蒔きへ……………六二

ち

知恵の輪を……………一〇三  
 近道を……………一〇五  
 地震にも……………七六

父親が……………一  
 父親に……………七六  
 父親の……………七八  
 父と来て……………七八  
 父の手の……………七七  
 乳飲ます……………一五七  
 松毬を……………一一二  
 地図と一緒に……………二二  
 血を分けた……………七五

つ

衝立の……………一三  
 通信簿……………七四  
 使い込み……………二〇  
 土少し……………一三四  
 つっ立った……………一〇六  
 つとさした……………一〇  
 妻がもう……………五四  
 妻の癖……………九  
 妻の日記……………五四

妻の留守……………一〇  
 妻若し産衣……………五五  
 妻若し水道……………五五  
 爪赤く……………四六  
 通夜の隅……………一六四  
 吊橋を……………一七

て

手紙など……………四  
 出来心……………四一  
 手際よい……………九六  
 でぼちゃんを……………九九  
 デマ売って……………八九  
 テレビ買わぬを……………一九  
 テロリスト……………一六二  
 手を汚さない……………一五九  
 天才の……………一八  
 天を指す……………八七

と

東京で……………一三七

東京へ……………	一三七	夏料理……………	六五	猫がもう……………	五六
同居して……………	一二四	何もせぬのが……………	一一四	猫の首……………	一四五
童心に……………	六〇	菜の花を……………	六二	猫の眼に……………	一三五
稲門の……………	九三	名を挙げて……………	一一二	熱の子へ……………	一〇
遠い灯は……………	一四				
都会淋しや……………	一二九	に		の	
都会の哀愁……………	一二九	肉体と……………	五一	野菊咲く……………	六七
都会の夜……………	八	逃げおさせる……………	四〇	飲み仲間……………	九四
独身の……………	一五四	逃げるための……………	八四		
毒舌に……………	五七	二次会の……………	九四	は	
図書館も……………	一三〇	日銀は……………	一四〇	肺病が……………	九一
鳶の輪の……………	一二六	日記帳……………	三四	慕建てる……………	一六四
泊る気に……………	四六	日本へ……………	一二八	履きかえの……………	三八
虎の皮……………	一四三	似は似ても……………	八四	恥を知る……………	一一一
鳥籠を……………	一五〇	二枚ずつ……………	三二	パチンコの……………	八九
綴帳の……………	三八	鶏も……………	一〇八	鳩に餌を……………	一五〇
トンネルを……………	五八	人間の……………	一〇二	パトロール……………	一一七
		人相が……………	一〇〇	パトロンが……………	四七
な				鼻かめば……………	一三〇
夏祭……………	一四九	ね		花束の……………	一三四

花の香を……………三九  
 花の散る……………三八  
 鼻を振る……………八三  
 母親を……………一五六  
 養母にある……………一四八  
 母に似て……………五二  
 春らしい……………七九  
 バンガローから……………一一六  
 バンガロー隣は……………一一六  
 万歳万歳……………二七  
 番台にも……………四三

ひ

日当りの……………一四〇  
 灯がついて……………五六  
 引金を……………三〇  
 卑怯者に……………一一九  
 美人とは……………五一  
 七七忌……………二五  
 七面鳥……………八二

筆勢が……………一二七  
 一口も……………四一  
 人の世や……………一六五  
 一人旅……………一五一  
 独り身に魚の……………一五四  
 独り身に造花の……………一五四  
 火に熔けぬ……………一四二  
 病院の……………九〇  
 病室に……………九〇  
 病人の恋は……………三四  
 病人の長い……………四  
 昼の月……………一七

ふ

封印を……………九七  
 風鈴が……………一六〇  
 風鈴を……………一三  
 武運長久……………一六二  
 深く吸う……………一三六  
 不器用な……………八〇

へ

腹案を……………一四〇  
 複雑な……………八九  
 無精髭……………一四六  
 文机に……………二一  
 降って来たから……………一九  
 冬晴れて……………六  
 プラスアルファ……………二六  
 フランス語……………一三五  
 振り返りは……………五〇  
 故郷を……………一〇八  
 ブローカーの……………一二八

ペコペコの……………一一一  
 別居して……………一二五  
 別荘は……………一一〇  
 ベッドから……………七七  
 蛇が皮を……………四七  
 ベレー帽……………一二七  
 弁当の……………一二五

ほ

暴君の	五七
某月某日	九七
牧場の	一五一
僕の齡	九一
ポケットに	一二三
ポケットの	七四
埃っぽい	一〇二
ボス今日は	一五七
保線夫の	一五八
牡丹へは	六二
仏様へ	一一〇
頬杖の	一〇六
惚れている	三五
本心が	一五
本心を	九三
ほんぼんの	五二

真心を……………六五

真ッ直ぐな……………八七

真人間……………一〇四

継母の……………四九

満員車……………九五

み

見合にも……………一六

見えずいた……………四二

見栄もなく……………一五八

湖の……………八六

水際に……………八一

水鼻を……………一一三

道ちよっと……………一一三

道遠し……………一〇六

皆帰る……………一三三

皆君の……………二四

未亡人……………四八

みんな姦……………一五五

む

麦の穂が……………一二

め

眼鏡にも……………三一

飯を食う……………二五

も

もう俺を……………三五

もう嘘を……………五三

モーニング……………三五

衷服着た……………九

や

焼跡の……………一一八

やせっぱち……………一一五

やはり雑犬……………八一

病み上り蟬を……………五

病み上り街は……………五

ま

ゆ

夕立の……………七  
 浴衣着た……………六三  
 浴衣着て……………五七  
 雪皚々……………二八  
 行きかえり……………八三  
 雪の朝……………六八  
 行き先は……………七九  
 指にさえ……………四四  
 湯の宿の……………一五〇  
 湯槽出る……………一六

よ

用心棒……………一二一  
 幼稚園……………七〇  
 欲のない……………七七  
 横顔に……………一四三  
 横丁の……………一二四  
 横やりが……………一一五

余生送る

……………八二

淀川の

……………二四

四人目の

……………一五六

夜の茶漬

……………七六

呼鈴を

……………一六〇

夜の汽車

……………一二三

ら

ライバルの

……………一三六

磊落に

……………一三六

落選の

……………一七

り

力士いま

……………一〇四

倍氣して

……………四八

れ

靈柩車

……………一六五

冷水摩擦の

……………一四五

レジャーブームを

……………一四二

ろ

老醜の

……………二〇

労働歌

……………二

六十を

……………二〇

わ

若い目が

……………一〇三

わが妻に

……………一四

## あとがき

僕の句集が出る。実にうれしい。

僕の句が、『川柳雑誌』の昭和三十一年三月号、近作柳樽欄に、初めて二句掲載されてから、約六年半の歳月が流れた。

もう十数年にもなるが、亡父が、若い日に留学をしたドイツやスイスへの追想、戦時中のマニラでの生活、それに、交友関係の思い出などを纏めた随筆を、創元社から出版したことがある。無鉄砲な僕は、父が出版したのならとばかり、暇に書き寄せた原稿を一括して、樋之上町の創元社へ持参に及んだのだったが、

「十万円持って来れば出版する。」

と、剣もほろろに追い返された。当時、僕達の住む堂島の土地が、坪三千円もしなかったのだから、その時の僕の魂消ようたらなかった。そして、著書の出版など、わが一生には思いもよらぬことと、深く肝に銘じたのであった。

それ故に、今回の出版は例えようもなくうれしい。川柳を知り、川柳に精を出したお蔭であり、麻生路郎先生のご援助の賜物である。

路郎先生は、僕が、西尾葉先生の推薦を得て、昭和三十二年二月、不朽洞会に入会し、先生の門下の一員となつてからこの方、句に関する限り、旨くなつたとも拙いとも、一言も仰言ることがなかった。唯、毎月呈出する川柳塔への投句十句の、入選句没句を通じて

暗黙の啓示があるばかりであった。僕は、この暗黙のご指導を一層効果あらしめるよう、僕自身の方法で心を尽した。又、句会へ頻繁に出席した年、殆んど雑詠だけに限って作句をした年などが、僕の生活の変化にもなって現れた。収録した句を分類して見ると、雑詠吟としての句が約半数、課題吟で得たのが残り半数という比率になっている。

とまれ、これは僕の第一句集であり、一里塚に過ぎない。先生と、数多の諸先輩のご指導で、再び、一步一步蝸牛の歩みが続けてゆくことであらう。

本書出版に当り、選句をはじめ、題字、装幀からカットに至るまでの配慮、その他万端に亘って、先生のお手を煩わし、川柳雜誌社のご支援を戴いたが、これらに対する感謝の気持は言葉では云い尽し得ない。師恩の大きき、大樹の庇護を思うばかりである。

最後に、写真の撮影をこころよく引き受けてくださったジャパン・タイムス大阪支社の山本邦氏に深甚の謝意を表する。

昭和三十七年七月十一日 三十六回目の誕生日に

橘 高 薫 風 子

昭和三十七年九月十一日印刷  
昭和三十七年九月廿三日発行

川柳叢書  
有情集・柳川



發行所

価 二五〇円

著者 橋高薫風子

発行者 麻生幸二郎

大阪市住吉区万代  
西五丁目二五番地

大阪市住吉区万代  
西五丁目二五番地

川柳雜誌社

電話大阪 空一局 六八二番  
振替大阪 七五〇五〇番

麻生路郎主宰 創刊大正十三年

# 川柳の雑誌

★本誌は斯界の最高峰の柳誌、内容の充実と誌代の低廉は本誌の誇りとするところ。現柳壇へ幾多の名家を送り出した本誌は貴方が柳壇への登竜門として選らぶべき最良のものである。即刻申込まれたし。

深く研究を續けたい人人の

ためには川柳不朽洞会へ

入会の便宜がある。

誌代一部 九〇円 送料六円  
半力年 五七六円 千 共  
一力年 一〇八〇円 千社負担

入門も奥義も『川柳雑誌』から

## 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二五  
電話 大阪(0)5081番 振替 大阪75050番



川柳雜誌社版

---